

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-510	17-018	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名（原題／訳）		
<p>Alcohol consumption pattern and risk of Barrett's oesophagus and erosive oesophagitis: an Italian case-control study</p> <p>飲酒パターンとバレット食道およびびらん性食道炎のリスク：イタリア人を対象とした症例対象研究</p>		
執筆者		
Filiberti RA, Fontana V, De Ceglie A, Bianchi S, Grossi E, Della Casa D, et al.		
掲載誌		
Br J Nutr. 2017 Apr;117(8):1151-1161. doi: 10.1017/S0007114517000940.		
キーワード		PMID
バレット食道、食道炎、症例対照研究		28478792
要 旨		
<p>目的： 飲酒習慣とバレット食道、逆流性食道炎等との関連については一致した見解が得られていない。バレット食道と飲酒とは関連がないとされているが、ワイン摂取時には負の関連があると報告がある。本研究では、習慣的に摂取しているアルコール飲料の種類と、バレット食道およびびらん性食道炎との関連について、症例対照研究によって検討した。</p> <p>方法： 2009年3月から2012年10月までに、イタリアの複数施設による12の内視鏡ユニットにおいて、新規にバレット食道またはびらん性食道炎と診断された症例、および検査施設・時期が同一の対照群に対し、アルコール飲料別の飲酒量、飲酒期間、その他の基本情報を聴取した。統計解析には多項ロジスティック回帰モデルを用いた。</p> <p>結果： バレット食道群 339名、びらん性食道炎群 462名、対照群 619名（平均年齢はそれぞれ、56.2、52.6、53.7歳）を解析対象とした。赤ワインおよび白ワインの摂取量とバレット食道およびびらん性食道炎リスクとにU字の関連が見られた。蒸留酒については摂取量によって、バレット食道およびびらん性食道炎を有するオッズ比1.4-2.3であったが、統計的に有意ではなかった。ビールの摂取量および摂取期間は、バレット食道と有意な負の関連を示した（各々傾向性 $P=0.009, 0.002$）。やや不明瞭であるものの、びらん性食道炎に関しても類似の傾向が見られた（各々傾向性 $P=0.078, 0.801$）。</p> <p>結論： 多くは統計学的に有意ではなかったが、ビールまたは少量のワインの摂取者でバレット食道およびびらん性食道炎のリスクが低い傾向が見られた。一方で、大量の飲酒ではバレット食道およびびらん性食道炎のリスクが高まることが示唆された。</p>		